

3. 足利の関連文化財群

(1) 「関連文化財群」の設定の考え方

足利には多種多様な文化財が数多く存在することが明らかになっているが、それぞれの文化財は個別に、あるいは種別、地域ごとに認識されることが多かった。一方で、足利氏に関する遺跡や社寺などあるテーマに沿って文化財を眺めるとその歴史や関連性についてより興味深く理解することができる。

今後、足利の文化財の価値について、市民の理解を得るためには、地域特性や時間軸(歴史の変遷)、精神性等の様々な視点から、足利固有のテーマを見だし、テーマに関連する文化財を一定のまとまりを持って認識することができるようなしくみを構築するとともに、市民自らが再認識できるように工夫しながら、地域の魅力を高めることにつなげていく必要がある。

「関連文化財群」は、これまで個別に認識されてきた文化財等について、歴史的・地域的関連性等に基づく一定のまとまりとして、地域の歴史文化を物語る重要な資産と捉えられるとともに、その魅力や価値を分かりやすく示し総合的に保存・活用していくことを目指すことから、以下の条件を満たすよう設定する。

- 有形・無形、指定・登録・未指定を問わず多種多様な文化財を含んでいること。
- 地域の固有性という観点から、足利の歴史文化を顕著に物語る文化財群であること。
- 市民・行政等による保護の取組が既に行われているものを含む、あるいは今後、保護の取組が期待されているもの。

i. 足利の歴史文化の特性を象徴するキーワードをテーマとしたストーリーを有する

前項で明らかにした、5つの足利の歴史文化の特性にそってキーワードを示し、それぞれのテーマに基づくストーリーの構築が可能なもの。

ii. 現存する文化財による構成

各関連文化財群の構成する文化財は、現存する、かつ起源・変遷等がある程度把握されている文化財を対象とする。

iii. 関連文化財群としての顕著な価値を有する

それぞれの関連文化財群について、保存及び活用の対象となる価値(足利の歴史文化を物語る文化財群としての価値)を有するもの。

なお、前項で抽出した足利の歴史文化の特性を象徴するキーワードは、概ね時代の変遷から明らかになったものであるが、これらキーワードは、必ずしもある特定の時代のみを示すものではない。特に「教育」、「産業」、「芸術文化」、「信仰」、「慣習」といった側面は、足利の長い歴史の中で人々の生活の中で脈々と培われていたり、またある時代に隆盛を迎えた後にも、人々の手が加わったり、姿・形を変えながらも受け継がれているといえる。従って、ひとつの関連文化財群を構成する文化財については、ある特定のキーワードを如実に示す隆盛を誇った時代を基に設定するが、そのストーリー展開は幅広い時代を含有し、テーマが理解しやすくなるよう説明を行っていくこととする。

(2) 関連文化財群の設定

関連文化財群の設定の考え方を基に、関連文化財群のストーリー、構成する文化財及び価値を以下のとおりに設定する。

表：足利市の関連文化財群のストーリー・構成する主な文化財

テーマ (キーワード)	関連文化財群のストーリー	構成する主な文化財
古墳	A. 古墳と古墳発掘のものがたり	◆古墳 ◆出土遺物 ◆発掘調査時の交流の場 等
足利郡と 梁田郡	B. 古代律令制下のまちづくりと信仰の ものがたり	◆郡衙跡 ◆条里跡 ◆神社 ◆寺院・寺院跡 等
足利氏	C. 足利氏からはじまる武家の統治と文化の ものがたり	◆神社 ◆政治・行政上の拠点跡 ◆寺院・寺院跡 ◆城館跡 ◆記念碑等 ◆祭り・行事等 ◆美術工芸品 等
足利学校	D. 日本最古の学校・足利学校と学校を 守り伝えた人々のものがたり	◆学校跡 ◆書籍 ◆美術工芸品 ◆行事 ◆足利学校関連人物ゆかりの地・記念碑 等
交通の要衝	E. 近世足利の交流と発展のものがたり	◆街道 ◆宿場町跡 ◆河岸跡 ◆陣屋跡 ◆地割 ◆用水路 等
織物産業	F. 織物産業の隆盛と近代化するまちのものがたり	◆織物産業関連の工場 ◆織物産業関連の住宅 ◆神社 ◆祭り ◆美術工芸品 ◆近代土木施設・建造物
田崎草雲	G. 田崎草雲を生み出した足利の芸術文化の ものがたり	◆田崎草雲のアトリエ・記念碑 ◆田崎草雲の芸術作品 ◆文人サロン ◆塾・寺子屋 ◆芸術作品(田崎草雲以外)
祈り	H. 足利の庶民による祈りのものがたり	◆石造物 ◆富士講 ◆絵馬 ◆神楽 ◆現代に息づく民間信仰の地 等
かかあ天下	I. 足利を支えた女たちのものがたり	◆北条時子関連の建造物・記念碑等 ◆織物関連の品 ◆絵馬 ◆石造物 ◆女子教育の地
山・川・平野	J. 自然と共に歩む人々の営みのものがたり	◆信仰の対象となった自然 ◆芸術の対象となった自然 ◆人々に恵(産物)をもたらした自然 ◆特徴的な自然 ◆田中正造の足跡

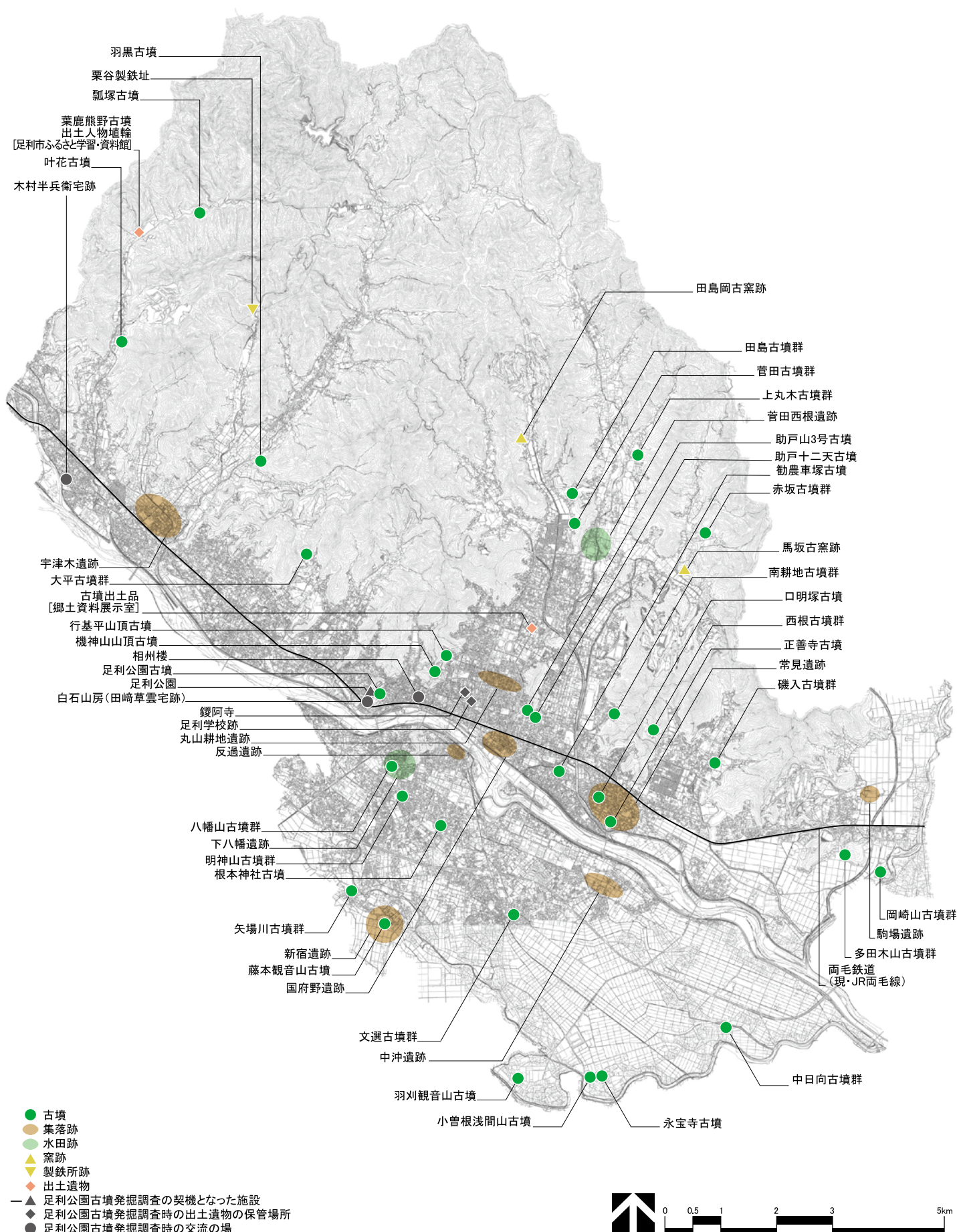
自然・地理的環境を基盤とした文化

足利の歴史文化を培った自然

(山陵、野、河川)

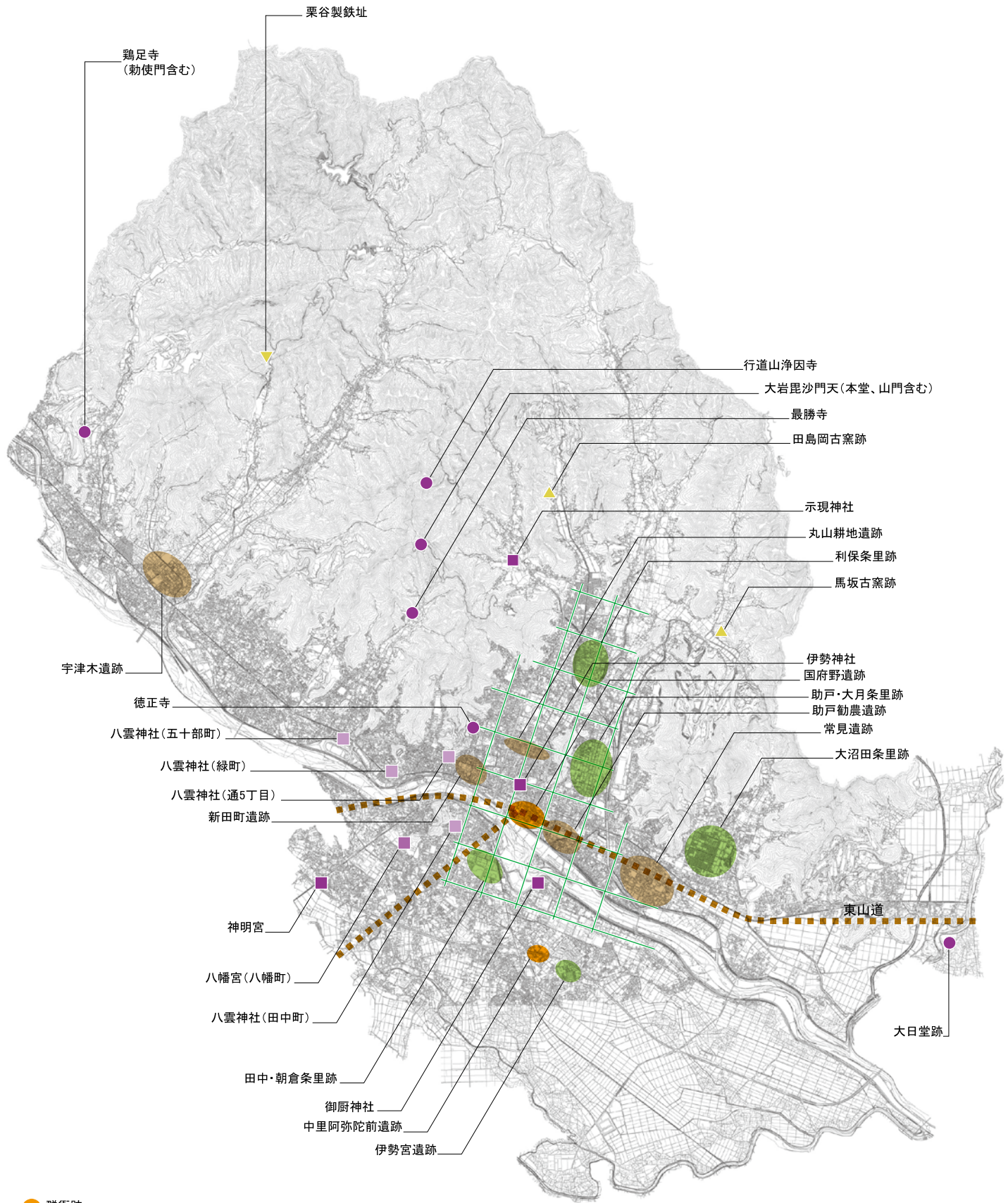
A. 古墳と古墳発掘のものがたり

ストーリー	<p>○足利の古墳 足利市域には現在約 1,300 基の古墳が残り、古墳の多いまちである。 およそ 4 世紀から 7 世紀にかけて古墳が造られた時代は、畿内大和政権を中心とした支配が全国に広がり、現在の栃木県・群馬県は毛野と呼ばれ、大和政権の影響下にあった。古東山道、あるいは古東海道を経て東へ波及していった古墳文化は、4 世紀に足利の地にも到達し、矢場川流域に藤本観音山古墳や小曾根浅間山古墳という首長墓の築造に至った。藤本観音山古墳は全長約 117.5m の前方後方墳である。前方後方墳としては全国 5 位の規模を誇る。小曾根浅間山古墳は全長 58m の前方後円墳で、埴輪を立てた古墳としては栃木県で最も古い。</p> <p>5 世紀・古墳時代中期になると太田天神山古墳を築造した首長が、足利を含む周辺地域を支配したと考えられる。勸農車塚古墳、助戸十二天古墳は足利の古墳時代中期を代表する古墳であるが、その形は帆立貝型の前方後円墳であり、規制された様子がうかがえる。</p> <p>6 世紀・古墳時代後期になると、東部毛野地区に常見古墳群が造営される。100m を超える前方後円墳である正善寺古墳—50m の円墳である海老塚古墳—48m の円墳である口明塚古墳等首長墓の変遷がわかる。常見古墳群は足利全域を支配していた首長の墓と考えられるが、市内には山間部を中心に 10~20m 程度の数基から百基の円墳が密集して造営される群集墳が数多くみられる。群集墳の中には 30m クラスの前方後円墳が築造されているものもあり、小首長による地域支配がされていたと考えられている。</p> <p>このように現在の足利市には、古墳時代前期～後期までに造られた様々な種類の古墳が残されている。また、古墳だけでなく、古墳時代の生活・生産の痕跡を示す集落跡、水田跡、窯跡、製鉄所跡等の遺跡も足利市内各所に見ることができる。</p> <p>○坪井正五郎による古墳調査 明治 19 年(1886)夏、東京大学の坪井正五郎(日本の人類学の先駆者)によって足利公園古墳が発掘調査された。この調査は、日本人の手による初の近代的な古墳発掘調査であり、日本考古学史上に名を残すこととなった。</p> <p>この発掘調査は、両毛鉄道(現在の JR 両毛線)の敷設の調査・測量に先立ち足利を訪れた、東京大学総長であり鉄道技師でもある渡邊洪基が、足利公園の出土品の重要性を見抜き、坪井正五郎に調査を指示したことに始まった。約 2 ヶ月近く足利に滞在し調査を行った坪井正五郎は、小俣の織物買継商・木村半兵衛家別荘に滞在し、滞在中は古墳の発掘だけでなく、足利の祭、方言、習俗等についての記録をとったり、織物産業の関係者や田崎草雲等と積極的な交流を図っていた。渡邊と坪井は出土品を足利学校へ寄贈する手はずを整えていたが、その後鏝阿寺に寄贈されることとなり、現在まで保管されている。</p> <p>坪井とともに古墳調査をした峯岸政逸はその後も古墳や古物に興味を持ち、明治 26 年(1893)には機神山山頂古墳の発掘を行っている。</p> <p>丸山瓦全は足利の通 5 丁目の商家に生まれたが、商売は弟にまかせ、考古学者として活躍した。明治 44 年(1911)には助戸十二天古墳の発掘調査を帝室博物館の高橋健白に、昭和 11 年(1936)には織姫神社境内古墳の調査を後藤守一らに依頼するなど人脈を活かして中央の考古学者に発掘調査をまかせ、古墳研究を進めるとともに文化財保護を実践した。戦後は早稲田大学の滝口宏教授の指導により近藤義郎、前澤輝政らにより明神山古墳群の発掘調査が行われている。</p>
構成する文化財	<p>◆古墳／藤本観音山古墳、八幡山古墳群、足利公園古墳群、機神山山頂古墳、口明塚古墳、正善寺古墳、永宝寺古墳、小曾根浅間山古墳、助戸山 3 号古墳、助戸十二天古墳、瓢塚古墳、行基平山頂古墳、明神山古墳群、中日向古墳群、羽黒古墳、根本神社古墳、叶花古墳、大平古墳群、矢場川古墳群、羽刈観音山古墳、菅田古墳群、多田木山古墳群、岡崎山古墳群、田島古墳群、田中古墳群、上丸木古墳群、勸農車塚古墳、南耕地古墳群、西根古墳群、磯入古墳群、文選古墳群、新宿古墳群、赤坂古墳群、海老塚古墳石室</p> <p>◆集落跡／新宿遺跡、国府野遺跡、常見遺跡、丸山耕地遺跡、反過遺跡、宇津木遺跡、中沖遺跡、駒場遺跡</p> <p>◆水田跡／菅田西根遺跡、下八幡遺跡</p> <p>◆窯跡／馬坂古窯跡、田島岡古窯跡</p> <p>◆製鉄所跡／栗谷製鉄址</p> <p>◆出土遺物／葉鹿熊野古墳出土人物埴輪(ふるさと・学習資料館)、藤本観音山古墳出土品、機神山山頂古墳出土品、口明塚古墳出土品等(郷土資料展示室)、足利公園古墳出土品(鏝阿寺・郷土資料展示室)</p> <p>◆足利公園古墳発掘調査に関わる施設／足利公園、両毛鉄道(現 JR 両毛線)、鏝阿寺、足利学校跡</p> <p>◆足利公園古墳発掘調査時の交流の場／白石山房(田崎草雲旧宅)、木村半兵衛宅跡、相州楼</p>
関連する人物	坪井正五郎、渡邊洪基、峯岸政逸、木村半兵衛、田崎草雲、相場朋厚、丸山瓦全、高橋健白、後藤守一、森貞成、近藤義郎、橋本勇

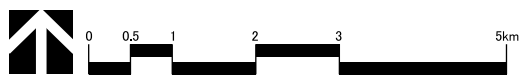


B. 古代律令制下のまちづくりと信仰のものがたり

ストーリー	<p>○律令制によるまちづくり</p> <p>奈良時代になると、政治の中心である朝廷は、律令により国を治め、全国は約 65 の国に分かれ、その国はまたいくつかの郡に分けられていた。このうち、足利郡と梁田郡と呼ばれる2つの郡が、現在の足利市域にあたり、その地名は今に残る。</p> <p>この時代、足利と都のある畿内は東山道と呼ばれる道で結ばれるようになり、足利駅が設けられた。足利駅は足利市街地の西部、現在の緑町から西宮町にかけて置かれたとの説がある。郡の役所である足利郡衙は JR 足利駅周辺にある国府野遺跡に、梁田郡衙は中里阿弥陀前遺跡にそれぞれ推定されている。郡は里、その後は郷として集落単位にまとめられ、足利郡のうち波自可里(葉鹿郷)は市内西部の葉鹿町にある宇津木遺跡とその周辺区域、田部郷は渡良瀬川右岸の田中町にある反過遺跡とその周辺、梁田郡の大宅郷は伊勢宮遺跡とその周辺に推定される。</p> <p>また、周辺の平野部には、1 辺約 109mの正方形による土地区画である条里制が敷かれ、前時代までの集落や生産の場を引き継ぎながらも、律令制下のまちづくりが足利において着実に進められた。現在は、郡衙や条里等の痕跡を地上部にて直接確認することは困難であるが、埋蔵文化財としてその存在が多く確認されている。</p> <p>○初期仏教から山岳密教へ</p> <p>律令制の社会は、貴族や地方官人にはその地位や財産を守るのに好都合であった一方、民衆は苛酷な収奪をされ、苦しい生活を強いられていた。信仰の面では、奈良において奈良六宗ができる等、高度な仏教文化が栄えたが、底辺にいる農民にとっては無縁なものであった。</p> <p>そのような社会において、薬師寺の僧であった行基は、灌漑や土木工事等の社会事業の普及を行うとともに、民衆に仏教を説いてまわった。和銅6年(713)この行基が足利を訪れたとされ、行基は行道山、大岩山、両崖山に堂宇を築き、足利の民衆に仏教を説いたといわれている。</p> <p>平安時代に入ると、最澄・空海による山岳密教が興隆し、足利においても東大寺の僧定恵が小俣の山中に堂宇をおこした(現在の鶏足寺)。また、前代に築かれた堂宇も、浄因寺(行道山)、最勝寺(大岩山)等として山岳密教信仰の場となっていった。</p> <p>○二つの足利氏</p> <p>この頃、通5丁目と緑町の八雲神社が下野守等として足利を治めていた藤原村雄(藤原秀郷の父・藤原姓足利氏の祖)により創建されたとされている。緑町周辺には明石姫や薬師堂など藤原氏に関わる伝承が残されており、足利市の市街地西部に古代藤原氏の拠点施設がおかれていた可能性があり、古代のまちの守りとして上下の八雲神社が祀られたと考えられる。</p> <p>一方、八幡太郎義家は後三年の役で奥州に向かう途上に八幡宮(八幡町)を創建したとされる。八幡宮の北西には「源氏屋敷」という地名があり、八幡宮の南方には義家が陣を張ったとされる大将陣という地名が残っている。平安時代後期、足利は2つの足利氏によってまちづくりが行われていた。</p>
構成する文化財	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 郡衙跡／国府野遺跡、中里阿弥陀前遺跡 ◆ 条里跡／田中・朝倉条里跡、助戸・大月条里跡、利保条里跡 ◆ 集落跡／助戸勸農遺跡、丸山耕地遺跡、伊勢宮遺跡、宇津木遺跡、新田町遺跡、常見遺跡 ◆ 窯跡／馬坂古窯跡、田島岡古窯跡 ◆ 製鉄所跡／栗谷製鉄址 ◆ 神社／御厨神社、神明宮、伊勢神社、示現神社、大手神社、大原神社、子の権現 ◆ 寺院・寺院跡／行道山浄因寺、最勝寺、大岩毘沙門天、鶏足寺、徳正寺、大日堂跡 ◆ 神社(藤姓足利氏による創建)／八雲神社(緑町)、八雲神社(五十部町)、八雲神社(田中町)、八雲神社(通5丁目) ◆ 神社(源氏による創建)／八幡宮(八幡町)
関連する人物	<p>行基、定恵、平将門、藤原村雄、源義家、藤原秀郷、明石姫</p>



- 群衙跡
- 条里跡 (往時の足利群・梁田群の条里(想定))
- 集落跡
- ▲ 窯跡
- ▼ 製鉄所跡
- 神社
- 神社(藤姓足利氏による創建)
- 神社(源氏による創建)
- 寺院・寺院跡



C. 足利氏からはじまる武家の統治と文化のものがたり

ストーリー

○藤姓足利氏と源姓足利氏

後三年の役を契機として源義家は足利を領有した。義家の子・義国は義家の遺領である足利の地を安楽寿院に、梁田郡の私領を伊勢神宮に寄進し、それぞれ足利の庄、梁田御厨を立券した。義国の子・義康の代には足利に住するようになり、足利の姓を名乗るようになった。

一方、足利に基盤を築きつつあった藤原氏も成行の代、天喜2年(1054)には足利城を構え、足利姓を名乗るようになった。当初は源姓足利氏の下司職として足利の庄を支配していた形跡がうかがえるが、源姓足利氏が足利に土着するようになると両者が対立するようになる。

このように平安時代末期の足利には藤原氏の流れをくむ藤姓足利氏と、源氏の流れをくむ源姓足利氏が、足利における武士団として台頭し、争うようになった。

○足利氏の統治と文化

治承4年(1180)源頼朝が、平治の乱で衰退した源氏の再興を期して、平氏を相手どり挙兵した(源平合戦)。この時、藤姓足利氏は平氏に、源姓足利氏は源氏に加勢をした。そして、頼朝の挙兵から6年後、壇ノ浦の合戦で敗れた平氏が滅亡するのに伴い、足利忠綱も足利で自害し、藤姓足利氏も事実上亡びた。

源平合戦において功績を挙げた源姓足利氏の棟梁である足利義兼は、その後の奥州合戦にも頼朝に従って出陣する等、鎌倉幕府の重鎮としての地位とともに、新たな足利荘の領主としての地位を確立した。義兼は、まず、足利における政治・行政上の拠点となる居館(現 足利氏宅跡)を築いた。また、義兼自身はその後出家し、居館内に持仏堂(鏝阿寺の始まり)を建てた。一方、奥州合戦の戦勝祈願のため、足利の北東部・樺崎の地に樺崎寺を創建した。なお、樺崎寺には浄土庭園がつくられており、これは義兼が先の奥州合戦の際に見た平泉の寺院の影響を受けたものと考えられている。

義兼の思想は、その後も受け継がれ、義兼の子の義氏は鏝阿寺十二坊、法楽寺を、義氏の子の泰氏は智光寺、泰氏の子の頼氏は吉祥寺をそれぞれ創建するとともに、鏝阿寺は足利氏の菩提寺として、樺崎寺は廟所として整備し、その後も繁栄した。

足利尊氏は室町幕府を開くと鎌倉には鎌倉府を置き、鎌倉公方に関東の支配にあたらせた。この二元体制はその後軋轢を生む。足利は足利氏の本貫地であることから将軍家と鎌倉公方家による支配権が争われるようになる。鎌倉府には補佐役として関東管領が置かれ、当初は斯波氏、畠山氏が就いていたが、次第に上杉氏が独占するようになる。上杉氏が関東管領として鎌倉公方より大きな力を得るようになると、公方と上杉氏と対立するようになり、ついには永享の乱、享徳の乱となり鎌倉府は滅亡する。

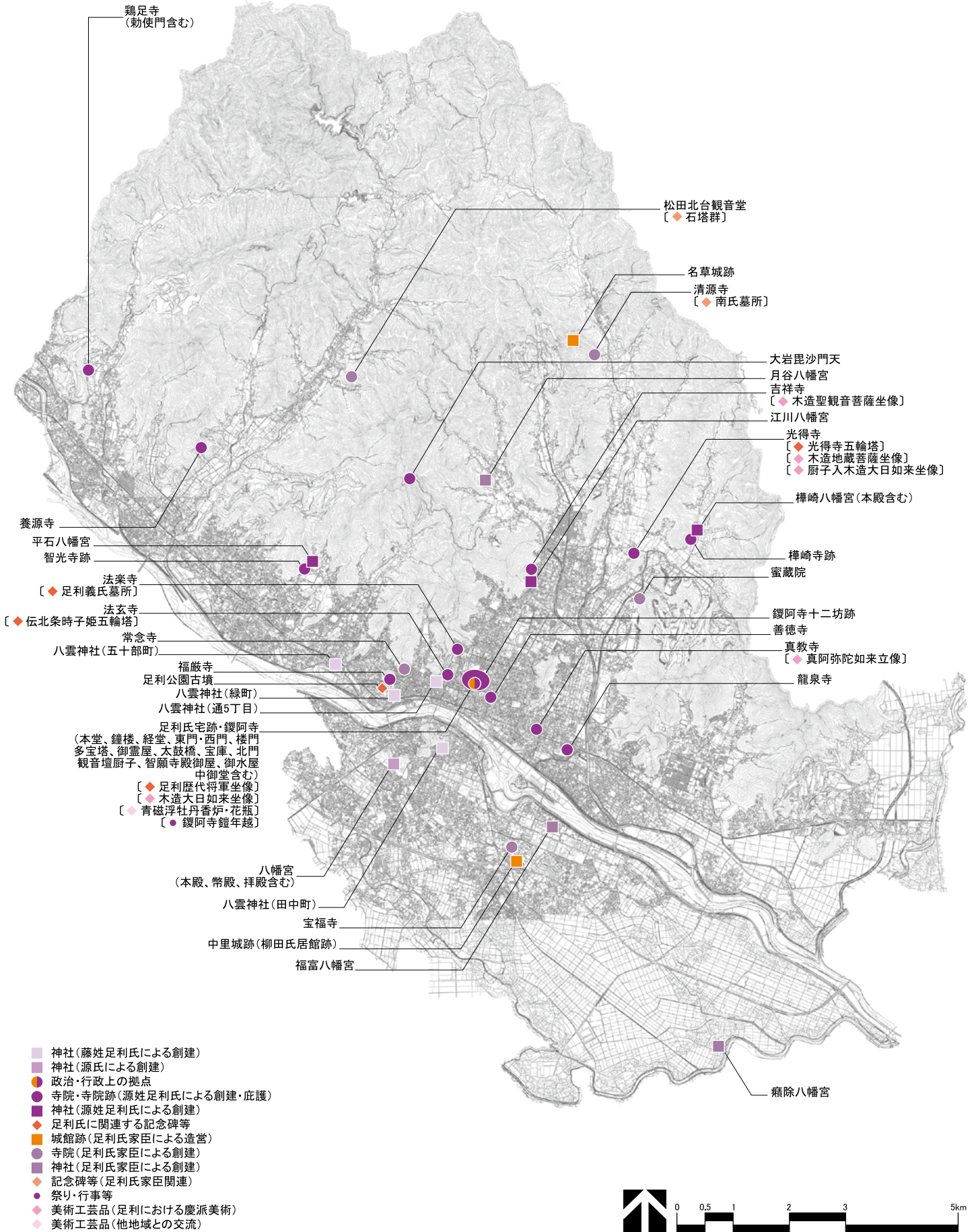
実質的に足利は関東管領上杉氏の統治となった。永享年間、関東管領・上杉憲実は足利学校を再興し、鎌倉の円覚寺の僧・快元を座主として招き、書物を寄進するなどの功績を残している。

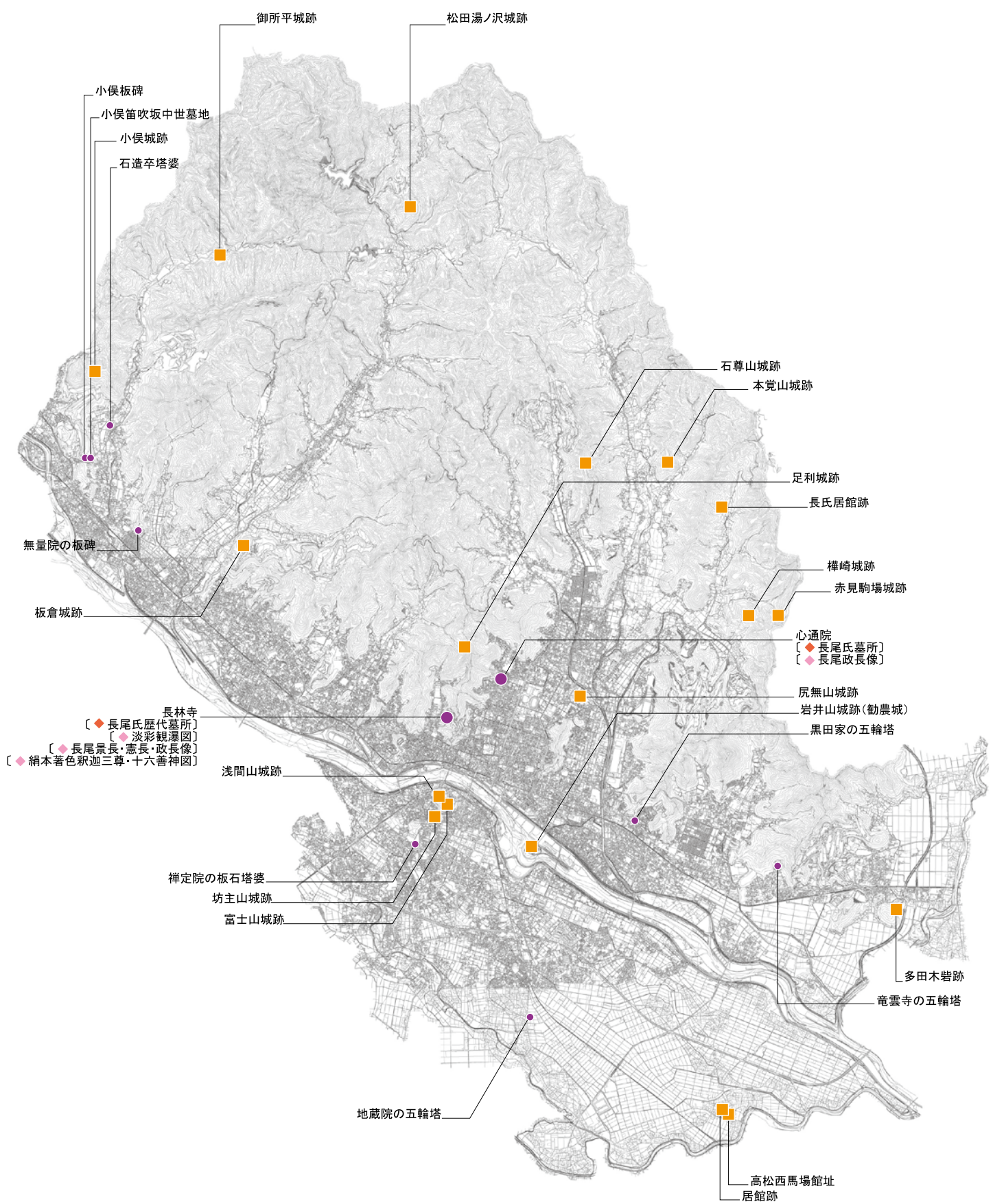
○長尾氏の統治と文化

関東管領上杉房顕の推挙により足利の庄の代官に任命された長尾景人(上杉家の重臣であった)は寛正6年(1466)勸農城に入った。長尾氏はその後足利の庄の支配者として戦国時代を生き抜く大名となっていった。勸農城に入った長尾氏は頻発する渡良瀬川の洪水を避けるため足利学校を現在の場所に移した。永正年間には足利成行により築かれた足利城に入城し、大改修したとされる。これにより足利城の周辺は城下となり、城下町が整備されることとなった。あわせて足利の荘内に山城、物見を配し、足利城を本城とする本城支城体制を整え、戦いに備えた。戦国期にはこうした城を拠点にして戦いが繰り返された。戦乱が続く中、天正18年(1590)の秀吉による小田原攻めでは小田原城に籠って戦い、北条氏と命運を共にした。

また、景人の孫である景長は画家としても知られ、市内には山水図が、菩提寺である西宮長林寺には自画像と伝わる絵が伝世している。長尾氏は狩野派の祖である絵師・狩野正信と姻戚関係にあるとされ、正信の初期の山水図が西宮長林寺に所蔵されている。

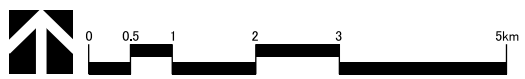
構成する文化財	<ul style="list-style-type: none"> ◆神社(藤姓足利氏による創建)／八雲神社(緑町)、八雲神社(五十部町)、八雲神社(田中町)、八雲神社(通5丁目) ◆神社(源氏による創建)／八幡宮(八幡町) ◆足利氏の政治・行政上の拠点／足利氏宅跡・鏝阿寺 ◆寺院・寺院跡(源姓足利氏による創建、庇護)／鏝阿寺、樺崎寺跡(法界寺跡)、吉祥寺、法楽寺、智光寺跡、鏝阿寺十二坊跡、養源寺、鶏足寺、法玄寺、福厳寺、龍泉寺、光得寺、善徳寺、真教寺、大岩毘沙門天 ◆神社(足利氏による創建)／樺崎八幡宮、平石八幡宮、江川八幡宮 ◆足利氏に関連する記念碑等／光得寺五輪塔(光得寺)、足利歴代将軍坐像(鏝阿寺)、伝北条時子姫五輪塔(法玄寺)、足利義氏墓所(法楽寺)、足利公園古墳、村田家石塔群 ◆城館跡(足利氏家臣による創建)／中里城跡(柳田氏居館跡)、名草城跡、松本城跡 ◆寺院(足利氏家臣による創建)／常念寺、宝福寺、清源寺、蜜蔵院 ◆神社(足利氏家臣による創建)／癩除八幡宮、福富八幡宮、月谷八幡宮 ◆記念碑等(足利氏家臣関連)／松田北台・観音堂境内の石塔群、宮内の五輪塔、南氏墓所 等 ◆祭り・行事等／鏝阿寺鎧年越 ◆美術工芸品(足利における慶派美術)／木造大日如来坐像(鏝阿寺)、厨子入木造大日如来坐像(光得寺)、木造地藏菩薩坐像(光得寺)、真阿弥陀如来立像(真教寺)、木造聖観音菩薩坐像(吉祥寺) ◆美術工芸品(他地域との交流による)／青磁浮牡丹香炉・花瓶(鏝阿寺)、燈 <hr/> <ul style="list-style-type: none"> ◆城館跡(長尾氏・長尾氏家臣等による造営)／足利城跡、岩井山城跡(勸農城)、居館跡、多田木岩跡、御所平城跡、小俣城跡、叶花山城跡、松田湯ノ沢城跡、板倉城跡、富士山城跡、樺崎城跡、尻無山城跡、本覚山城跡、稻荷山城跡、赤見駒場城跡、石尊山城跡、浅間山城跡、坊主山城跡、高松西馬場館址、長氏居館跡、南氏居館跡 ◆寺院(長尾氏による創建)／長林寺、心通院 ◆長尾氏に関連する記念碑等／長尾氏墓所(心通院)、長尾氏歴代墓所(長林寺) ◆美術工芸品(長尾氏の画業)／淡彩観瀑図(長林寺)、長尾政長像(心通院)、長尾景長・憲長・政長像(長林寺)、山水図(長尾景長筆 個人)、絹本着色釈迦三尊・十六善神図(長林寺) ◆中世石造物／小俣板碑、石造卒塔婆、小俣笛吹坂中世墓地、竜雲寺の五輪塔、黒田家の五輪塔、地藏院の五輪塔、無量院の板碑、禅定院の板石塔婆 等
関連する人物	<p>源義家、源義国、源義康、足利義兼、北条時子、足利忠綱、足利義氏、足利泰氏、足利頼氏、足利家時、足利貞氏、足利尊氏、南宗継、高師直、長尾景人、長尾景長、長尾憲長、長尾政長、快元</p>





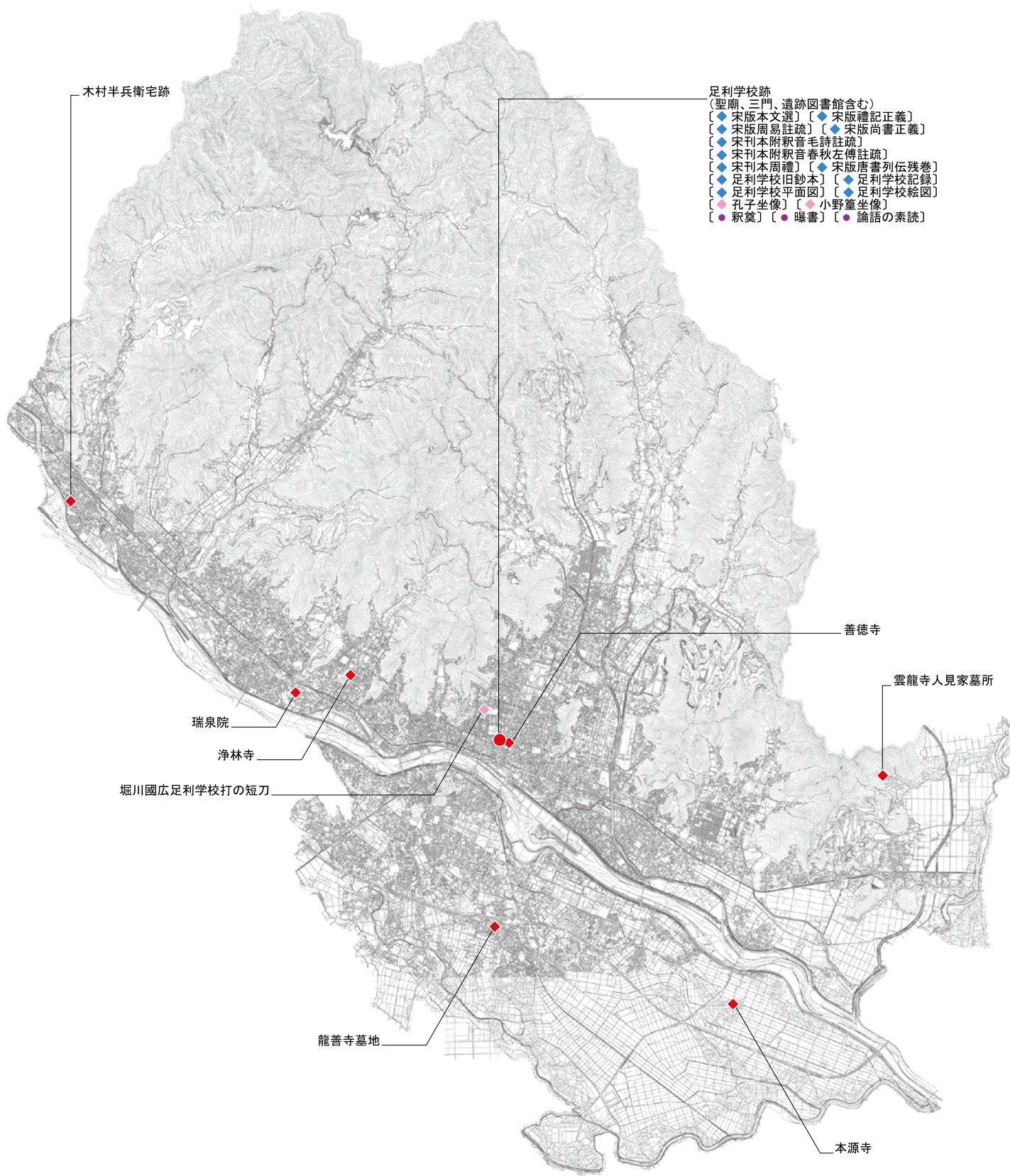
長林寺
 [◆ 長尾氏歴代墓所]
 [◆ 淡彩観瀑図]
 [◆ 長尾景長・憲長・政長像]
 [◆ 絹本着色釈迦三尊・十六善神図]

- 城館跡(長尾氏・長尾氏家臣等による造営)
- 寺院(長尾氏による創建)
- ◆ 長尾氏に関連する記念碑等
- ◆ 美術工芸品(長尾の画業)
- 中世石造物



D. 日本最古の学校・足利学校と学校を守り伝えた人々のものがたり

ストーリー	<p>○足利学校の歩み</p> <p>足利学校は「日本最古の学校」である。</p> <p>その創建については、古代の国ごとに置かれた教育施設「国学」の名残であるというもの、参議であった小野篁により創建されたというもの、足利義兼が子弟の学問所として設立したというもの等諸説があるが、はっきりとわかっていることは永享 11 年（1439）時の関東管領上杉憲実により再興されたということである。その後、応永元年（1467）には上杉氏の代官・長尾景人によって現在の場所に移されたという。</p> <p>足利学校の活動がピークを迎えたのは戦国時代である。全国から「学徒三千人」が集まったとされ、学徒は儒学、易学、兵学、医学等を学び、卒業生は戦国武将の参謀として活躍した。また、日本に布教に来ていたフランシスコ・ザビエルやルイス・フロイスは「坂東のアカデミア」として足利学校を紹介し、キリスト教の布教の妨げになると本国に報告している。</p> <p>長尾氏の滅亡後、豊臣秀吉により足利学校は廃止の危機にあったが、天正 17 年（1589）に第 9 代座主となった三要が尽力し保存に成功した。三要は家康の学術顧問となり円光寺の創立や、木活字本による出版事業を行っている。第 10 代座主の寒松も足利学校の地位を守るとともに多くの書籍の収集を行った。代々座主による書籍の収集、建物の整備、幕府による保護などにより江戸時代を通じて学問の中心としての地位が守られた。また、江戸時代には、毎年新年にその年の占い（年筮（ねんぜい））を徳川将軍に届けた。学校としての役割は薄れたが、中世から守り伝えられてきた古典籍を見るため、全国各地から文人たちが訪れるようになった。</p> <p>度重なる落雷や火災による危機を乗り越えてきた足利学校であったが、明治維新により、一時足利藩の藩校となり、その後すぐに栃木県の管理下におかれ廃校となった。その後、足利藩士であった相場朋厚が中心となって保護運動がおこり、明治 14 年（1881）には地元有志らが県から足利学校遺蹟保護委員に委嘱され、明治 28 年（1895）には管理委員となり、次いで明治 36 年（1903）には町長を委員長とする管理委員会がつくられ、同年に新設された足利学校遺蹟図書館と一体となって、貴重な書物を守ってきた。明治 6 年（1873）には敷地の東半分が小学校（後の足利市立東小学校）となったが、大正 10 年（1921）には内務省より国の史跡に指定された。ところが、昭和 7 年（1932）頃には足利市によって土塁の一部が破壊され、これに対し丸山瓦全は毅然と立ち向かい、市を訴えるという事件があった。</p> <p>その後、昭和 57 年（1982）には東小学校が移転し、発掘調査によって足利学校の遺構が明らかになった。平成 2 年（1990）には史跡整備が完了、現在は年間 18 万人の参観者を迎える。</p>
構成する文化財	<ul style="list-style-type: none"> ◆学校跡／足利学校跡（聖廟、三門、遺蹟図書館含む） ◆書籍／宋刊本文選、宋版禮記正義、宋版周易註疏、宋版尚書正義、宋刊本附釈音毛詩註疏、宋刊本附釈音春秋左傳註疏、宋刊本周禮、宋版唐書列伝残卷、足利学校旧鈔本、足利学校記録、足利学校平面図、足利学校絵図（以上足利学校跡） ◆美術工芸品／堀川國広足利学校打の短刀（足利市民文化財団）、源景国足利学校の刀（足利市所有）、孔子坐像（足利学校跡）、小野篁坐像（足利学校跡） ◆行事等／釈奠（せきてん）、曝書（ばくしょ）、論語の素読 ◆足利学校関連人物ゆかりの地・記念碑等／浄林寺、雲龍寺人見家墓地、本源寺、善徳寺、龍善寺墓地、瑞泉院、文宣王碑、木村半兵衛宅跡
関連する人物	<p>小野篁、足利義兼、上杉憲実、上杉憲忠、上杉憲房、快元、九華、三要、寒松、長尾景人、徳川家康、フランシスコ・ザビエル、ルイス・フロイス、人見竹洞、田代三喜、曲阿瀬道三、土井利房、渡辺華山、岡谷繁実、戸田忠行、川上広樹、田崎草雲、相場朋厚、丸山瓦全、白沢保美</p>



- 足利学校跡
 (聖廟、三門、遺跡図書館含む)
 [◆ 宋本文選] [◆ 宋版禮記正義]
 [◆ 宋版周易註疏] [◆ 宋版尚書正義]
 [◆ 宋刊本附釈音毛詩註疏]
 [◆ 宋刊本附釈音春秋左傳註疏]
 [◆ 宋刊本周禮] [◆ 宋版唐書列伝残卷]
 [◆ 足利学校旧鈔本] [◆ 足利学校記録]
 [◆ 足利学校平面図] [◆ 足利学校絵図]
 [◆ 孔子坐像] [◆ 小野篁坐像]
 [● 釈奠] [● 曝書] [● 論語の素読]

- 学校跡
- ◆ 書籍
- ◆ 美術工芸品
- 行事等
- ◆ 足利学校関連人物ゆかりの地・記念碑等

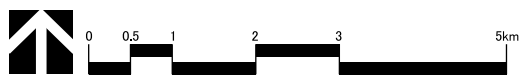


E. 近世足利の交流と発展のものがたり

ストーリー	<p>○街道と舟運を活かした交流</p> <p>足利は古代以来、東山道が通り、足利の駅が設けられるなど交通の要衝であった。東山道を起源とする足利の東西を貫く通りは位置を少しずつ変えながらも中世、近世、近代、そして現代も重要な道である。</p> <p>河川も原始以来物資を運ぶ重要な交通路であった。古墳時代前期、矢場川流域には藤本観音山古墳や小曾根浅間山古墳といった首長墓が築造され、矢場川が首長にとって押さえるべき重要な河川であったことが推定される。古墳時代後期、足利の首長墓群のある毛野地区の常見遺跡は足利の河川流域を押さえる拠点でもあった。</p> <p>時を経て、江戸幕府を開府した徳川家康の没後、朝廷より日光東照宮に幣帛を奉獻するための勅使（日光例幣使）が通る道として日光例幣使道が整備された。足利における例幣使道には八木宿、梁田宿の2つの宿が置かれ、往来する人々で賑わいを見せるようになった。幕末には梁田宿で幕府軍と官軍との間で戦争が勃発している。例幣使道沿いには道しるべや例幣使ゆかりの神社などが残されている。また、八木節の発生については諸説あるが、例幣使道の宿にいた遊女が唄い、街道沿いに馬方が伝え、大正時代に馬方出身の堀込源太がレコーディングして全国にひろめたとされている。</p> <p>一方、寛永元年（1624）以降、年貢米を江戸へ運ぶために、渡良瀬川を利用した舟運が行われるようになり、沿岸には河岸が築かれた。幕府に認められた河岸は奥戸河岸と猿田北河岸と南河岸であるが、幕末になるとアウトサイダーの船がさらに上流の新町にも上るようになった。猿田河岸は、周辺地域からの荷物の集積地として、渡良瀬川上流域の物資を利根川の水運に結びつける機能を有し、江戸と足利を結ぶ舟運により江戸との交流が盛んとなった。猿田北河岸の回漕問屋萬屋の当主・長四郎三は江戸でも貸金業を営んだ豪商で、茶人としても知られた。猿田の屋敷には茶室物外軒を建て、そこで催される茶会には江戸の名だたる文人も集ったという。長四郎三は菩提寺である徳蔵寺に五百羅漢像や千庚申塔を寄進している。</p> <p>渡良瀬川の舟運は明治時代に入ってから引き続いて盛んに行われ、明治 21 年（1888）に両毛鉄道が開通し、陸運による流通が主流となるまで続けられた。</p> <p>○都市と農村の発展</p> <p>長尾氏滅亡後、徳川幕府により大名や旗本の再編成がおこなわれ、足利における支配体制も大きく変わった。各村々は天領として、あるいは大名や旗本による分割支配となった。18世紀初頭には戸田氏が足利藩藩主として現在の雪輪町に陣屋を構え、街並みが整備された。人々の交流が盛んとなり、都市としての賑わいが見られるようになった。</p> <p>一方で、長年にわたり災害に見舞われてきた渡良瀬川の治水策としての堤防を築いたり、街の基盤が整えられていった。</p> <p>柳原用水や御厨用水が開削され新田開発が進み、農村も発展した。</p>
構成する文化財	<ul style="list-style-type: none"> ◆街道／日光例幣使道、桐生街道、三間道路 ◆街道に関連する記念碑等／日光例幣使道道標、梁田戦争戦死塚、日光例幣使短冊（川崎天満宮）、庚申塔、旗川渡河点、紙本墨画お国替絵巻 ◆旧宿場町／旧八木宿、旧梁田宿 ◆河岸跡／猿田河岸跡、奥戸河岸跡 ◆交流の産物・証／木造五百羅漢像附羅漢堂、千庚申塔（以上徳蔵寺）、八木節、円空仏（永宝寺）、物外軒 ◆神社／川崎天満宮 ◆陣屋跡／足利藩陣屋跡、足利藩陣屋門 ◆まちの地割／路地のあるまち ◆用水路／三栗谷用水、柳原用水
関連する人物	戸田忠利、岡上次郎兵衛景能、長四郎三、柳田市郎衛門、堀込源太、山田音羽子



- 街道
- ◆ 街道に関連する記念碑等
- 旧宿場町
- 河岸跡
- ◇ 交流の物証・証
- 神社
- 陣屋跡
- まちの地割
- 用水路



F. 織物産業の隆盛と近代化するまちのものがたり

ストーリー	<p>○織物産業の歴史と隆盛</p> <p>足利の織物の歴史は古く、和銅6年(713)足利織物が文献上に残る最古のものといわれている。また、鎌倉時代末期に書かれた随筆「徒然草」には、時の足利氏棟梁の足利義氏が執権北条時頼に「足利の染物」を贈った話が語られている。</p> <p>もともと足利地方では農家の副業として織物が織られていた。江戸時代に入り高機が導入されると、足利も絹織物の主産地として発展し、その立地条件から江戸との取引、交流が活発になった。また、江戸時代後半には綿織物も生産するようになり、京都・大阪や東北地方にまで販路を拡大していった。</p> <p>明治時代になると、織物の輸出が盛んになり、織物の生産量が増えるとともに、粗悪品が出回り問題となった。足利の買継商を中心に組合を組織して粗悪品を取り締まるとともに、織物・染色技術の向上が課題となっていた。そこで、明治18年(1885)に今福村に織物講習所を設立し後進の育成を図った。後の足利工業高校である。</p> <p>こうした織物業界の努力等により足利の織物産業はさらに隆盛した。初代木村浅七は明治16年(1883)から輸出絹織物に転換し、明治から大正にかけて本格的な工場制機械工業に成長した。明治36年(1903)には足利模範撚糸工場が建築され、現在も大谷石造の工場棟の一部が保存活用されている。大正2年(1913)には煉瓦造の足利織物工場が設立され、現在も工場として操業している。</p> <p>昭和初期には足利銘仙が全国一位の生産高を誇った。足利銘仙は有名画家にポスターを描かせるなど宣伝にも力を入れ、一大ブームを巻き起こした。戦後は織物業を復興する業者もあつたが、トリコットに転換し昭和30年代後半から40年代前半にかけて全盛期を迎えた。</p> <p>足利織物の守り神として奉られている足利織姫神社はもともと小さな社殿であったが、昭和12年(1937)に社殿が新築された。新社殿の設計は社寺建築を得意とした小林福太郎で宇治の平等院を模している。当時としては珍しいコンクリート造りであり、隆盛を極めた織物業界挙げての大事業でもあつた。</p> <p>○まちの近代化</p> <p>明治維新による版籍奉還、廃藩置県により足利藩は足利県、明治4年(1871)11月には栃木県となった。明治22年(1889)には町村施行により足利町となる。明治以降、織物産業の発展とともに、足利の街は急速に近代化を推し進めることとなった。明治6年(1873)には学校が設立され、明治17年(1884)には栃木県令三島通庸により桐生と佐野をつなぐ三間道路が建設された。三間道路のほとんどはその後、拡張や改修されているが、今福町、助戸町、富田町に一部が残っている。また、古くから懸案であった渡良瀬川の架橋については、近代技術の導入によって、明治35年(1902)の渡良瀬橋(木造トラス造、後昭和9年(1934)に鉄骨橋として架け替え)、昭和10年(1935)の中橋等、本格的な橋が実現することになった。それにより南北の流通・交流が盛んになった。さらに、織物の運送手段としての鉄道の敷設が木村半兵衛らによって計画され、明治21年(1888)に両毛鉄道が開通した。</p> <p>また、生活基盤としての電気・ガス・水道を供給する施設においても近代技術の導入が推進され、昭和5年(1930)には今福浄水場が竣工した。</p> <p>このように、織物産業の発展を背景としてつくられた建築物、土木構造物等、まちの近代化を物語る近代産業遺産が今も残されている。</p>
	構成する文化財
関連する人物	<p>木村半兵衛、木村浅七、金井繁之丞、川島長十郎、荻野篤太郎、近藤徳太郎、原田定助、原田政七、秋間為八、田島藤兵衛、岡嶋忠助、岩本良助、殿岡利助、富永金吉、前橋真八郎、茂木富二</p>

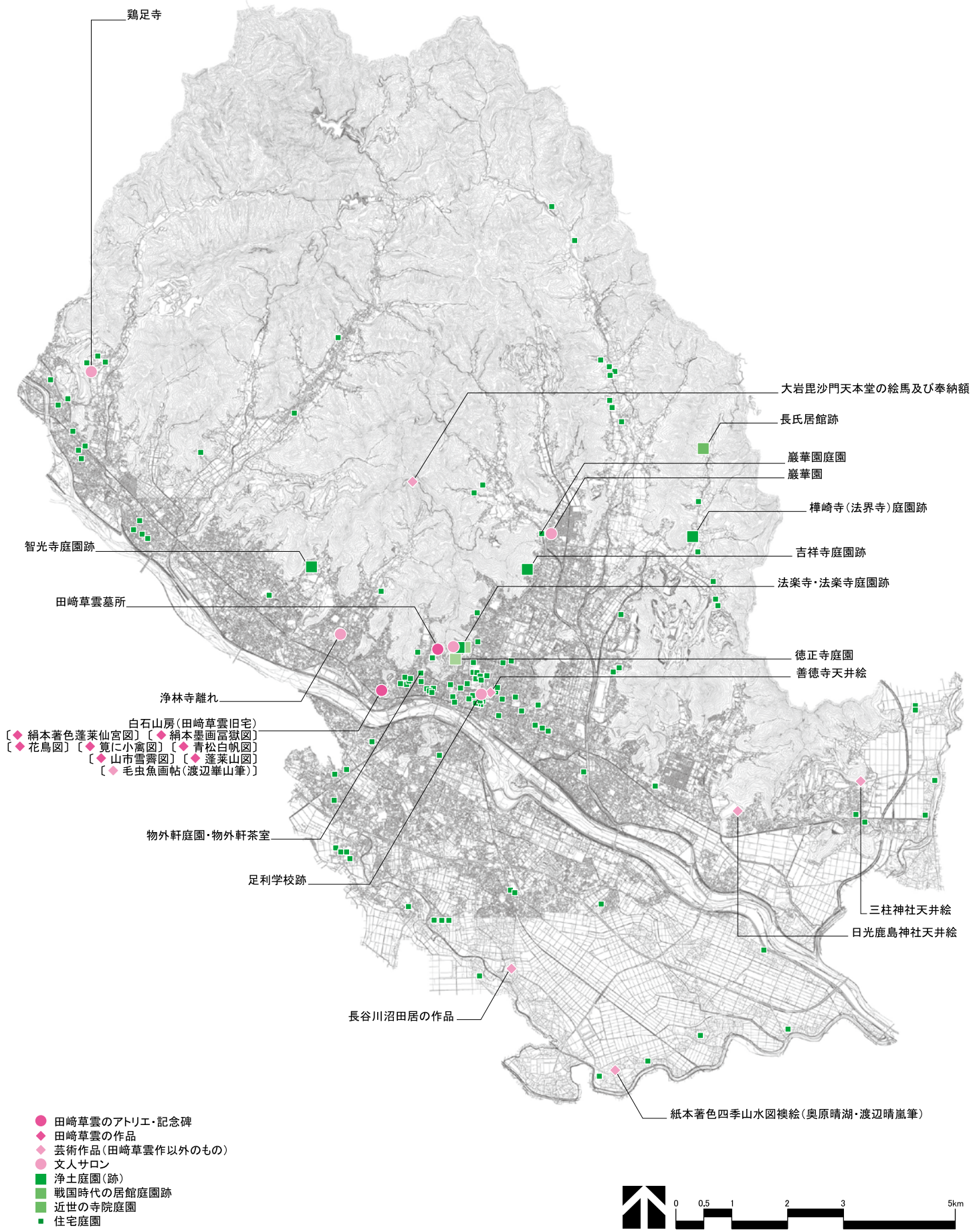


- 織物産業関連の工場・住宅等
- 神社
- ▲ 祭り
- ◆ 美術工芸品
- 近代土木施設・建造物



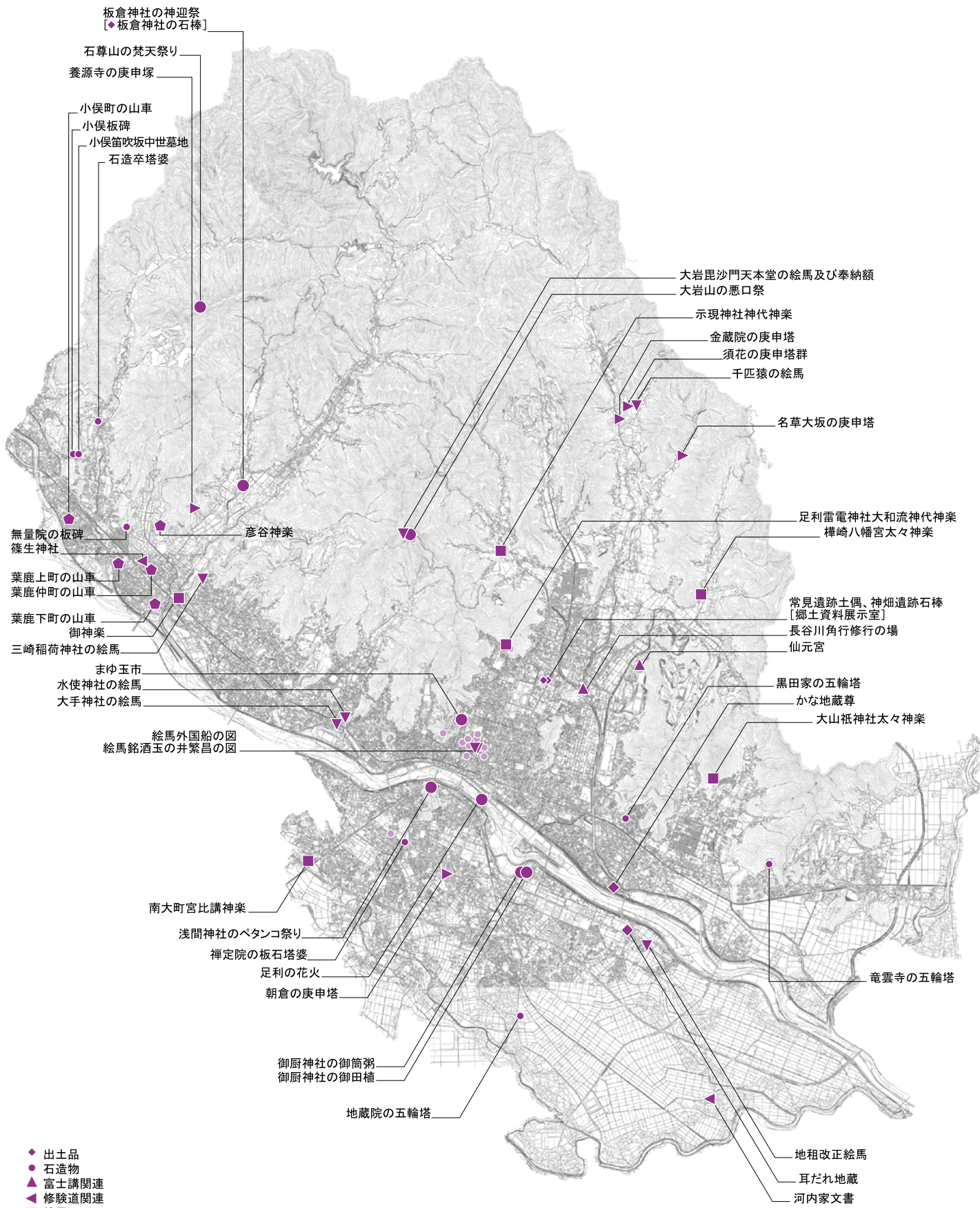
G. 田崎草雲を生み出した足利の芸術文化のものがたり

ストーリー	<p>○田崎草雲</p> <p>田崎草雲は、文化12年(1815)10月15日に、江戸神田小川町足利藩邸内にて生まれた。幼い頃から親戚の金井烏洲に絵画の手ほどきを受け、20歳のときに脱藩し谷文晁・渡辺華山らの画風を学んだ。嘉永6年(1853)には、足利藩の絵師に登用された。</p> <p>一方で、草雲は志士たちと交友を深め、尊王の志を強くし、幕末・維新の動乱期には誠心隊という民兵組織を結成し治安維持にあたり、足利を戦火から守った。明治維新後も木村半兵衛や旧足利藩士・相場古雲らとともに足利の近代化に尽くした。</p> <p>明治11年(1878)には、蓮岱寺山(現 足利公園内)の白石山房に移居し、山水・花鳥・人物など様々な作品を描いた。草雲の描く作品は、パリ万博やシカゴ世界大博覧会等で名誉牌を受けるなど国内外で高い評価を受け、明治23年(1890)には、芸術家にとって最も名誉ある帝室技芸員に橋本雅邦らとともに選ばれた。草雲の画業は単なる絵師としてのものではなく「文人」としてのそれであった。</p> <p>明治31年(1898)、84歳で静かにその生涯を閉じた。草雲没後は弟子や足利藩士を中心に草雲を顕彰するとともに草雲が残した白石山房や絵画を守った。昭和43年(1968)には白石山房の傍らに鈴木栄太郎氏により草雲美術館が建設され、足利市に寄付された。田崎草雲の代表作は美術館等で良好に保存され、今日でもその高い芸術性を観賞することができる。</p> <p>○文人文化</p> <p>室町時代足利の庄を支配した長尾景人は狩野派の祖である狩野正信と姻戚関係にあったとされ、景人も絵を良くした。当時の武将は教養として和歌や連歌を詠み、絵画も集めた。長尾氏が仕えた上杉氏の周辺も文化サロンを呈していた。</p> <p>中国の士大夫(知識人階級)にはじまる文人文化は、江戸時代の日本で多彩に開花した。月谷町にある巖華園は源姓足利氏を祖とする旧家で、江戸後期には椿椿山や高隆古といった文人墨客が遊び、サロンとなっていた。当主も椿椿山に絵を学んだ。国登録文化財となっている巖華園庭園は当時谷文晁が作庭し、その弟子の渡辺華山によって命名されたとされている。当時は中国の絵画を模写することが修練であり、巖華園庭園も文人が学んだ中国絵画に描かれた山水を習っているところに特徴がある。</p> <p>また、足利学校には貴重な古典籍や絵画などが所蔵されていたことから、各地から文人が来訪した。江戸後期からは丹南藩代官岡田東塙、奥河内清香といった文人が活躍し、法楽寺等の寺院も文人らの交流の場となった。文人が集う場は寺院や豪商の屋敷等が中心であり、そこには庭園がつくられた。庭園はその後も足利織物産業の興隆に伴い昭和時代まで作られ市内各所に残されている。そうした庭園の中には、池庭と茶室周辺の露地により構成される邸宅庭園の意匠や足利の茶の湯文化を現在に伝え、造園史上の意義が深いと考えられるものも多く残されている。</p> <p>以上のように、草雲の影響を受け近代化を促進した文化人や、豪商などの経済的富みを文化芸術に捧げた、明治・大正・昭和の文化を創造した多くの先人の文化財群が残されている。</p>
構成する文化財	<ul style="list-style-type: none"> ◆田崎草雲のアトリエ・記念碑／白石山房(草雲美術館・田崎草雲旧宅)、田崎草雲墓所(長林寺) ◆田崎草雲の作品／絹本着色蓬莱仙宮図、絹本墨画富嶽図、花鳥図、笈に小禽図、青松白帆図、山市雪霽図、蓬莱山図(以上草雲美術館)、牡丹図屏風(足利市民文化財団)等 ◆芸術作品(田崎草雲以外)／翎毛虫魚画帖(渡辺華山筆 草雲美術館)、紙本着色四季山水図襖絵(奥原晴湖・渡辺晴嵐筆 永宝寺)、三柱神社天井絵、長谷川沼田居の作品(長谷川沼田居美術館) ◆文人サロン／足利学校跡、巖華園、浄林寺離れ、法楽寺、鏝阿寺、高福寺 ◆浄土庭園(跡)／樺崎寺(法界寺)庭園跡、吉祥寺庭園跡、法楽寺庭園跡、智光寺庭園跡 ◆戦国時代の庭園／長氏居館跡 ◆近世の寺院庭園／徳正寺庭園、法楽寺庭園 ◆住宅庭園／物外軒庭園・茶室、巖華園庭園 等
関連する人物	<p>長尾景人、田崎草雲、相場古雲、奥河内清香、岡田東塙、渡辺華山、木村凍雲、古川竹雲、宗長、小室翠雲、飯塚頼北、長谷川沼田居、川上広樹、牧島如鳩、川島理一郎、岡崎清一郎、相田みつを</p>



H. 足利の庶民による祈りのものがたり

ストーリー	<p>○多様な祈りのかたち</p> <p>原始・古代において人々は自然に対して畏怖の念を持っていた。制御できない力を畏れながらも祈り、敬いながら対峙してきた。その祈りの対象としては山や巨木、泉など、祈りの形は土偶や石棒といった祭祀遺物に表れている。</p> <p>その後自然への祈りは原始神道へ引き継がれ、仏教の流入によって新たな信仰の形が取り入れられていった。仏教導入期には軋轢があったものの、神仏習合という知恵によって乗り越えられ日本の祈りの形が定まっていた。</p> <p>初期仏教は鎮護国家の思想の基に国分寺、国分尼寺が国ごとに建てられ、信仰とともに民衆支配の手段でもあった。足利には国分寺、国分尼寺はないが、大同年間に創建されたと伝えられる小俣の世尊寺(後の鶏足寺)が平将門の調伏祈願をするなど鎮護国家の役割として存在していた。大岩山や行道山が開かれたのもこの頃である。</p> <p>仏教の民衆への普及は村落内寺院の調査などによって8~9世紀には受容されていったことが明らかになりつつある。中世には足利氏を始めとする武士によって支配領域に寺社が建てられ、鎌倉時代中期には供養塔としての石造塔が造立されるようになった。火葬して石造供養塔を建てるのは一部の武士や僧侶に限られたが、戦国期以降は小型五輪塔や廟墓の造立が流行し、下層の武士や町衆にまで石塔の造立が広がっていった。</p> <p>江戸時代にはキリシタン禁制を進める幕府の寺請制度により、寺院が地域のよりどころとなっていった。一方、明治新政府の神仏分離政策によりこれまで神仏が一緒にまつられていた寺社、あるいは修験など檀家をかかえない寺の多くが神社となった。また、その後の神社合祀運動により小さな神社が統合されていった。</p> <p>現在、足利には宗教法人として登録されている神社172社、寺院が125カ寺を数える。このほかお堂や祠などを含めるとさらに多く、寺社の多いまちといえる。300を超える寺社の中には足利を治めた足利氏や長尾氏ゆかりのもの等が多く、それらは為政者や権力者による信仰あるいは支配の形ではあったが、その後庶民の信仰に支えられ、現在まで残されている。</p> <p>また、足利には風土に培われた民衆の独特の信仰が残されている。浅間神社をはじめとする富士講、庶民が競って奉納した数々の絵馬、寺社の境内や路傍にまつられている石造物などである。神社の祭礼の時、神様に捧げる歌や舞である神楽が、今日へと受け継がれ、伝統芸能として残されているなど、民衆の間で伝承され、語り・謡い継がれてきた独自の民俗に関わる文化財群が良好に残されている。</p>
構成する文化財	<ul style="list-style-type: none"> ◆出土品／常見遺跡土偶、神畑遺跡石棒、板倉神社の石棒 ◆石造物／小俣板碑、石造卒塔婆、小俣笛吹坂中世墓地、竜雲寺の五輪塔、黒田家の五輪塔、地藏院の五輪塔、無量院の板碑、禅定院の板石塔婆 等 ◆富士講関連／長谷川角行修行の場、長途路川、仙元宮、浅間神社胎内洞穴、富士講碑、富士塚 ◆修験道関連／篠生神社、高松坊、河内家文書、水垢離跡(島田町、名草町) ◆絵馬／三崎稻荷神社の絵馬(三崎稻荷神社)、絵馬外国船の図(鑿阿寺)、絵馬銘酒玉の井繁昌の図(鑿阿寺)、千匹猿の絵馬(須花講中)、大岩毘沙門天本堂の絵馬及び奉納額(最勝寺)、地租改正絵馬(星宮神社)、大手神社の絵馬、水使神社の絵馬 等 ◆庚申塔／金蔵院の庚申塔、名草大阪の庚申塔、朝倉の庚申塔、養源寺の庚申塚 ◆地藏／かな地藏尊(徳蔵寺)、たむし地藏、耳だれ地藏 ◆神楽／御神楽(大和流渋谷派)、大山祇神社太々神楽、示現神社神代神楽、樺崎八幡宮太々神楽、南大町宮比講神楽、足利雷電神社大和流神代神楽、彦谷神楽、春日神社神楽 ◆祭り／石尊山の梵天祭り、浅間神社のペタンコ祭り、板倉神社の神迎祭、御厨神社の御田植、御厨神社の御筒粥、大岩山の悪口祭、燈籠流し、まゆ玉市、茅の輪くぐり、地藏盆、獅子舞、夏祭り、花祭り、足利の花火、神輿かつぎ、七五三、初詣、成人式、庚申講(五十部町田地区) ◆山車／小俣町の山車、葉鹿上町の山車、葉鹿仲町の山車、葉鹿下町の山車 ◆現代に息づく民間信仰の地／大日さま(鑿阿寺)、学校様(足利学校跡)、出世稻荷、逆藤天満宮、ごんごろ様(五霊宮)、栄富稻荷と天満宮、井草閻魔堂(利性院)、延命地藏(高福寺)、織姫さま(織姫神社)、門田稻荷(縁切稻荷)、長尾弁天、名草の弁天、寺家の弁天 ◆彫刻／常念寺の神像
関連する人物	中山太郎、丸山瓦全

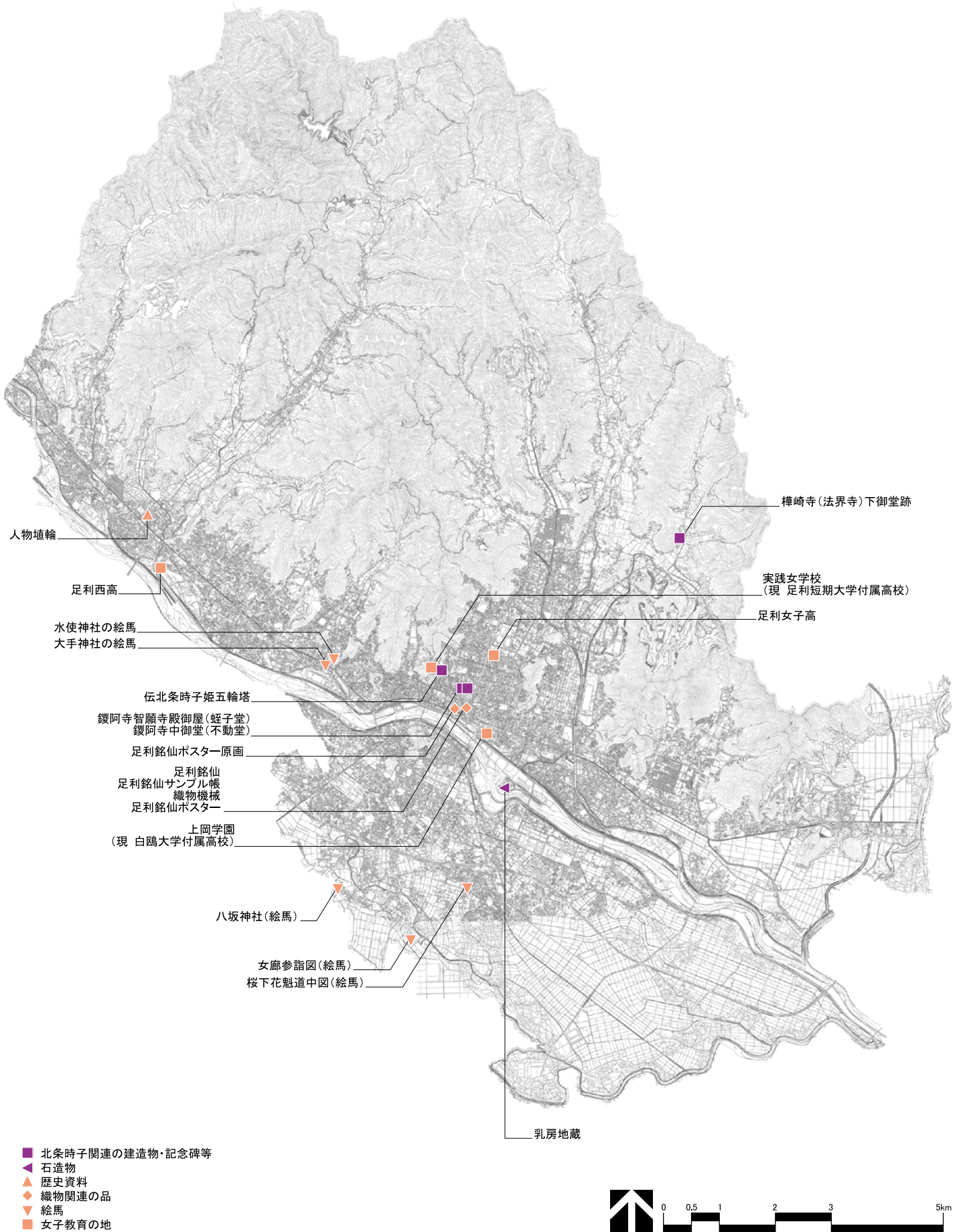


- ◆ 出土品
- 石造物
- ▲ 富士講関連
- ▼ 修験道関連
- 絵馬
- ▲ 庚申塔
- ◆ 地藏
- 神楽
- 祭り
- ◆ 山車
- 現代に息づく民間信仰の地



I. 足利を支えた女たちのものがたり

ストーリー	<p>○北条時子 日本の中世において、武家の女性は財産、相続権をもっていた。北条時子（北条政子の妹）はそうした中世の武家の女性の代表者の一人である。 足利義兼の正室であった北条時子には、次のような伝説が残されている。 夫・義兼が鎌倉に滞在中に時子の腹部が膨れて妊娠したような状態になり、侍女の讒言により義兼に密通の嫌疑をかけられた末、遂には、「死後わが身をあらためよ」との遺言を残して自害をしてしまった。時子の死後、遺体を調べたところ、腹部に蛭が充満しており、それは山野に出かけた際に飲んだ水が原因であったことが判明する。このことを知った義兼は、大いに悔やんだと言われる。 この時代の具体的な女性についての伝承が残されている例は少なく、この他様々な伝説が残されている北条時子は、足利氏にとっても大きな存在であったことを示しており、足利の女性史を語る上で欠かすことのない人物であると言える。 法玄寺は、非業の死を遂げた時子を弔うために、時子の子・義純によって創建された寺院で、境内には時子のもとと伝わる鎌倉期の五輪塔がまつられている。 また、足利氏の廟所である樺崎寺（法界寺）の下御堂跡には焼骨が納められた白磁四耳壺（北宋時代のもの）2 個体が埋納されていたと推定され、鑑定の結果、焼骨は女性の骨であったことがわかった。これは義兼の母と妻・時子との説もある。</p> <p>○織物産業を支えた女性 足利を含む上州における強いものの代表として「かかあ天下と空っ風」という言葉がある。足利は古代以来、下野国であるが、地勢的にも経済的にも上州圏にあり、この言葉は足利でも通用する。「空っ風」は冬場に西の赤城山から吹き下ろす強風のこと、かつては吹き始めると三日はやまないとと言われていたが、近年は温暖化の影響がだいぶ穏やかになった。 「かかあ天下」はどうか。通常、「かかあ天下」とは、家庭の実権を妻が握っている、というイメージであろうか。しかし、本来は「女性は働き者」という意味である。 足利は織物産業で栄えたまちであり、その産業を支えたのは多くの女性であった。足利における織物生産の基本的な仕組みは、注文を出す町や村に居住する元機（もとはた）と、下請けで製織にあたる主として村に居住する賃機（ちんばた）であり、織手のほとんどは女性であった。また、大規模な工場を抱える織元には周辺地域や東北地方、信越地方からも職工として多くの女性が集められ、養蚕の仕事も多くは女性達の手によっていた。このように、女性たちは現金収入を得て経済力を持ち、その経済力を背景に強くなったのは当然のことであった。また、全国有数の生産高を誇った足利銘仙も多くの女性を彩った。 一方、地方から集められた職工たちは少しでも機織りの腕を上げ賃金を稼ごうと絵馬に祈りを込めた。嫁いだ女性は後継ぎを望まれ、子宝祈願のため神社に詣で、婦人病で苦しむと人知れず絵馬を奉納した。村の女性たちは十九夜様で安産祈願だけでなく、世間話に花を咲かせ、日頃の苦労をねぎらいあっていた。 織物産業隆盛の時代、「かかあ天下」と呼ばれ、か弱くもたくましく生きてきた足利の女性たちの記憶をとどめる様々な文化財が今も足利に残されている。</p>
構成する文化財	<ul style="list-style-type: none"> ◆北条時子関連の建造物・記念碑等／鏝阿寺智願寺殿御屋（蛭子堂）、鏝阿寺中御堂（不動堂）、伝北条時子姫五輪塔（法玄寺）、樺崎寺下御堂跡（樺崎寺跡（法界寺跡））、薬師堂 ◆石造物／月待講、女人講、十九夜様、乳房地蔵、二十二夜様、二十三夜様 ◆歴史資料／三行半（古文書）、土偶、人物埴輪、紙本墨画お国替絵巻 ◆織物関連の品／足利銘仙、足利銘仙サンプル帳、織物機械、ポスター（以上足利まちなか遊学館）ポスター原画（足利市立美術館）、織姫神社織姫図 ◆絵馬／大手神社の絵馬、水使神社の絵馬、八坂神社の絵馬、女郎参詣図、桜下花魁道中図 等 ◆女性教育の地／実践女学校、足利女子高、足利西高、上岡学園
関連する人物	北条時子、山下りん、上岡た津、明石姫、妙印尼、山田音羽子



J. 自然と共に歩む人々の営みのものがたり

ストーリー	<p>○人々の営みと関わる自然</p> <p>原始以来人々は自然と闘いあるいは利用しながら暮らしを営んできた。旧石器時代から縄文時代にかけては狩猟採集により、野山の恵みを食料としていた。山の緩斜面には落とし穴を仕掛け獲物を得て、トチやドングリ等の木の実、キノコ等も貴重な食料であった。そうした暮らしのようすは神畑遺跡や奥戸遺跡の発掘調査成果から伺うことができる。</p> <p>紀元前 2000 年頃には大陸から稲作が伝わり、列島に広がっていった。これまでの狩猟採集だけでなく農耕によって計画的に食料の生産・消費を行うことができるようになった。稲作を行うため水路を整備し水田を耕作しなければならない。初期の稲作では小さい谷地等の小河川を利用して水田を耕作していた。水位を保つため小区画水田が地形に沿って作られていた。足利では菅田西根遺跡の発掘調査で古墳時代の小区画水田跡が出土している。</p> <p>一方、山林も大きな資源であった。木の実だけでなく、木は建築用材、燃料などに利用した。特に古墳時代中期以降伝播した窯業は山の斜面を利用して登り窯を築き、平地から吹き上げる風も利用した。山から切り出された岩は古墳の石室の石材や建物の基礎として利用された。名草の花崗岩は江戸時代に盛んに切り出され、神社の鳥居、旗立、橋などに加工されている。松田の粘板岩は硯石として、石灰は肥料や消毒として流通した。</p> <p>○渡良瀬川の鉱毒被害</p> <p>渡良瀬川はもとは現在の矢場川の流れ、渡良瀬川には清水川(冷水川)と呼ばれた小河川が流れていた。田を潤す水源であるが、時には洪水をおこし流域の住民に牙をむいた。中世末からたびたび大きな洪水を起こした渡良瀬川は永禄年間に清水川に流れ込み、ほぼ現在の河道となった。元龜年間には御厨用水が開削され、足利の穀倉地帯とも言える御厨地域に恵みをもたらした。</p> <p>ところが、明治 13 年頃より足尾鉱山から流失する鉱毒被害が知られるようになった。足尾銅山は江戸時代初期から銅を産出していた。明治初期に古河市兵衛が銅山を買い取り、巨額の資金と最先端の技術を投入して開発を進めた。急激な開発により山の樹木は枯死し、渡良瀬川は水量の減少、降雨時の洪水、鉱毒水流出による鉱毒害をもたらした。</p> <p>明治 20 年代には鉱毒被害の原因が足尾銅山にあることが確認され、明治 24 年(1891)には田中正造が帝国議会において初めて政府を糾弾した。被害地の各村々では上申書を提出するなどの行動に出たが、古河鉱業はわずかな保証金で示談を進め懐柔していった。しかし、安政 6 年(1859)以来の大洪水と言われた明治 29 年(1896)の大洪水により、甚大な被害を受け、このころから鉱毒問題は当事者だけでなく中央でも活発化した。これを受け鉱毒被害民は明治 30 年(1897)上京請願(押出し)を決行した。激しい行動に政府も鉱毒問題解決に取り組む姿勢を見せ始めたが、被害民に対する免租は町村の財政を破綻に追い込んだ。地方自治破壊に対する救護を求める請願運動は田中正造らによる運動とあいまって明治 31 年(1898)の第 3 回押出し、明治 33 年(1900)第 4 回押出しへと最高潮を迎えることとなった。第 4 回押出しでは請願運動の指導者が逮捕され、訴訟となった(川俣事件)。その後の大正末期には鉱毒問題は三栗谷用水組合の問題として取り上げられるようになり、昭和 10 年(1935)から三栗谷用水幹線改良事業鉱毒を除去するための事業が始まった。この事業では御厨町長であった岡村勇が尽力し、戦後まで 5 次に渡り継続し昭和 43 年(1968)に一応の完成を見た。</p>
構成する文化財	<ul style="list-style-type: none"> ◆信仰の対象となった自然／名草の巨石群、行道山、両崖山、大岩山、八幡山、大小山、石尊山、根本山、浅間山、弘法の池(南大町神明宮)、姥川源流の泉 ◆芸術の対象となった自然／行道山(浄因寺)(葛飾北斎の「諸国名橋奇覽足利行道山くものかけはし」)、渡良瀬川と渡良瀬橋(歌「渡良瀬橋」) ◆人々に恵(産物)をもたらした自然／名草の巨石群と花崗岩の石切り場跡、こころみ学園ココファームワイナリー、御厨田圃、採石場跡、鉱山跡、植林地、渡良瀬の鮎、大麦、蕎麦、イチゴ ◆特徴的な自然／ミツバツツジ自生地、足利のフジ、最勝寺暖地性植物自生地、ニホンカワモズク自生地(南大町神明宮)、迫間湿地 ◆鉱毒被害及び田中正造／室田忠七鉱毒事件日誌、三栗谷用水幹線改良事業記念碑、長福寺、田中正造墓(寿徳寺)、渡良瀬川、田中正造の手紙、田中正造の書(西中学校)
関連する人物	田中正造、原田定助、木村浅七、早川忠吾、長祐之、室田忠七、亀田佐平、岡村勇

